

令和二年度俳人協会宮城県支部新春賀詞交換会（通信俳句会）
成績表及び本部派遣選者高評

一 成績表

(一) 本部派遣選者（鈴木直充先生）選

○特選

裸木に裸木の影山静か

高木 秀子

雪を搔く音それぞれに路地親し

山田 昭子

茎桶の重石足したり減らしたり

大沼せつ子

○秀逸

コロナ禍のこころ灯すや石露の花

佐藤のびる

落葉して明るき青葉通かな

佐藤 尚

丑女七度目の春めぐり来る

高橋 洋子

白菜を抱へしばしの立ち話

槇尾 麻衣

朝影の光を返す草氷柱

幸野 峰

○佳作

馬上より独眼望む初山河

岡本 幸治

幼鳥に添う白鳥や朝日射す

加藤百合子

冬夕焼磐梯山の尖り立つ

江戸 裕子

初東雲阿武隈川の大蛇行

松本 裕光

空一枚蹴つて仕上がる梯子乗

屋代ひろ子

雪降るやここは終なる転勤地

小林 里子

湯のほかに愛想なき宿根深汁

柏原 眠雨

数え日の農協裏のフリマかな

鈴木 勝也

少年の頬の福毛や寒稽古

酒井美代子

居残りの部下の机に蜜柑置く

木村 裕一

(二) 互選高得点

○15点

空一枚蹴つて仕上がる梯子乗

屋代ひろ子

○10点

鯽起し呼ぶ剣舞の鬼太鼓

木村螢雪子

○9点

捨てかねし本また仕舞ふ十二月

黒田 洋子

○7点

菊人形蕾のままの白虎隊
百の窓賜る百の初日かな

澁谷としの
佐藤 拓郎

○6点

和紙工房ころ柿干してありにけり
紙漉の手に届く朝日かな
一湾を冬満月と渡りけり
色変へぬ松豆腐屋は三代目
釈迦の掌の時空に遊ぶ小春かな

鈴木 勝也
石川千代子
佐藤 綾泉
後藤 秋沙
木村螢雪子

○5点

雪こんこ絵本のやうな街景色
初御空おほらかに肩まはしけり
底冷やしみじみ黒き陀羅尼助
御降りに濡れて新車の祓はるる
雑踏にレノンの「イマジ」社会鍋
地下足袋の人足集う朝焚火
遠吠えの尾をひく銜冬の月

針金 聖子
二本柳力彌
鶴岡 行馬
杉山三枝子
佐藤 明子
及川奈奈夫
石川喜美子

二 本部派遣選者（鈴木直充先生） 高評

(一) 特選句

裸木に裸木の影山静か

高木 秀子

「裸木」のリフレインによって山の木々がみな葉を落として光景が見えてきます。この句は、一本の裸木の影がほかの木に投影している図をクローアップしています。けれども、この句をワイドに広げて見ると影を負った木も又ほかの木に影を落としている重層性があります。そして、木と影すなわち「実」と「虚」の曼陀羅界を現じているのです。色彩も明と暗だけのモノクロームで、静かにふかぶかと眠る山を暗示していますね。

雪を掻く音それぞれに路地親し

山田 昭子

雪が降ると家と家の間の路地には吹き溜まりができ易いですね。表通りを地域活動の動脈とすると路地は静脈のようなもので、塞がれると暮らに支障をきたします。そこで、どの家も雪掻きの開始です。掻く音がちがうのは、シャベルを持つ老若男女の力の差によるものでしょう。路地に響く雪掻きの音は、雪国の連帯をたしかめ合う音。「路地親し」は、雪がすすきりと掻かれた路地に近隣の人たちの行き交いが戻った喜びの表現です。

茎桶の重石足したり減らしたり

大沼せつ子

冬、大根や蕪を葉付きのまま塩や糠に漬け込むのが茎漬けですね。茎桶も重石も家に代々受け継がれてきたものでしょう。嫁入りした方も伝統の味が染み込んだ桶と石を懇ろに扱って家の味を身に付けてゆきます。塩の

按配をして「重石足したり減らしたり」しながら滋味ふかい茎付けが出来あがりませぬ。その漬物は直接ご飯のおかずになるだけでなく、汁物に載せたり炒め物に使ったり、ひと冬の一家の健康を支えてくれるのです。

(二) 秀逸句

コロナ禍のこころ灯すや石露の花

佐藤のびる

新型コロナは世界中を席捲しています。「コロナ禍」という言葉は、家政のコレラ、大正のスペイン風邪などと共に歴史に刻まれるでしょう。家に籠ることを余儀なくされ、鬱々としていた作者は、石露の花に見入りました。暗い世情のなかで明るく凛と咲く石露の花は、生きる喜びを与えてくれたのですね。

落葉して明るき青葉通りかな

佐藤 尚

「青葉通り」は仙台市内のストリート名ですね。仙台城が青葉城と言われているように「青葉」は仙台の代名詞になっています。青葉通りの街路樹はすっきり落葉し、車道と歩道の境がひらけて燦々と冬日が差し込まれます。遅しい「青葉」から力を抜いた「枯木」への情景転換が明るさをもたらしています。

丑女七度目の春めぐり来る

高橋 洋子

丑年生まれの自分を「丑女」と自称しています。他人をこのように呼んだら問題ですが、自分を戯画化して詠むと俳諧味がゆたかになりますね。丑年を七周した作者は、八十の坂を越えています。来し方さまざま喜怒哀楽があつたに違いありませんが、牛歩で悠々と八度目の春を迎えられることでしょうか。

白菜を抱へしばしの立ち話

榎尾 麻衣

白菜は畑から収穫したものでしょう。しっかり葉を巻いた重量感のある白菜とお見受けします。家へ帰る途次、ぼったり知人と会いました。作者は畑の土が付いても構わない服装でしょうから、相手は気の置けない人。白菜を抱きしめ、立ち話の始まりです。「しばしの」とありますが、長くなりそうですね。

朝影の光を返す草氷柱

幸野 峰

流れの水をかぶったり、露にまみれた草が凍っているのが「草氷柱」ですね。大自然の一隅で凜冽たる景を見せています。氷柱の中には枯れずに緑を残した草が入っていて透けて見えます。そこへ、さっと朝日が差し、草氷柱がキラリと日を返したのです。朝日を「朝影」とした措辞が趣を深くしています。